

## アクション・リサーチ報告：創作を利用した文法教育の試み

### An Action Research Report : Introducing Creative Writing to a Grammar Class

津 田 早 苗

Sanae TSUDA

キーワード：アクション・リサーチ、英文法、創作、ファカルティー・ディベロプメント、  
日本人学習者

Key words : Action research, English grammar, Creative writing, Faculty development,  
Japanese students

#### 要約

これは本学の講義科目「英語の構造」に創作を導入したアクション・リサーチの報告である。2006年春学期に創作コンテスト、ESSC (Extremely Short Story Competition) の形式に従った作文を筆者の授業に導入し、学生が授業で学んだ文法の知識を英語の創作表現に生かす機会を与えた。そして、このような試みが学生の英語に対する興味を喚起するのに有効であるかどうかを検証した。このアクション・リサーチは筆者個人の授業改善を目指すと同時に、同じような試みを大学全体の授業改善に生かすことを目的としている。また、授業に取り入れた英語による創作の試みは筆者の属する学会の活動との共同研究活動により学習者コーパスの構築を目指す。

#### Abstract

This action research project involves my class, my institution and an academic society to which I belong. In the spring semester of 2006, I introduced a 50 word essay writing, which is called ESSC (Extremely Short Story Competition), to "Structures of English" a grammar class in order to give students an opportunity to express their thoughts in writing and examined if it could motivate them to use English creatively on their own. The result of this research is reported at a staff meeting of my university to introduce an idea of action research as a tool to exchange ideas among the staff and to improve teaching of our Faculty. The Japanese Association for Asian Englishes (JAFAE) sponsors ESSC to encourage Japanese speakers to use English creatively and also uses it as a part of an international co-operative research to collect written data of Englishes used by non-native English speakers. My classroom research is one of the preliminary

experiments done by the members of the society.

## 研究の目的

英文法の講義科目に英語の創作を導入することにより、学生がどの程度英語に興味を持つようになったか、また、教員がそれぞれの学生をどれだけ個人として知ることができたか、また、どれだけ学生が英文法を習得しているかを教員が把握できたかを検証する。この検証にはアクション・リサーチの手法を用い、その結果を今後の筆者の授業に生かすことを目指す。同時にこの結果を学内で報告し、多くの教員がそれぞれの授業内でアクション・リサーチを実施すれば大学全体のFDとなることを指摘する。

## アクション・リサーチとは？

アクション・リサーチはクラスルームリサーチとも呼ばれることからわかるように、授業を対象とした研究であり、「教師が授業を進めながら、生徒や同僚の力も借りて、自分の授業への省察とそれに基づく実践を繰り返すことによって、次第に授業を改善していく授業研究である(佐野 2000、p.31)」と定義される。

次に一般的なアクション・リサーチの手順を示し(佐野、pp. 53-60.)、本研究のリサーチ手順を具体例としてあげる。

### 1. 問題の確定(自分が抱えている問題点をしぼり込む)

リサーチを始める前に、自分の授業にどのような問題があるかを考え、問題点を確定する。筆者の授業の場合は英文法の規則の説明と演習のみの英文法の授業では学生の興味が持続しにくいことが問題であると考えた。

### 2. 予備的調査(現状を知る)

授業の最初に学生の英語に対する態度に関するアンケート調査を行った。

### 3. 仮説の設定(仮説・計画をたてる)

通常の英文法の授業に50語の英文を書く作業を加えることにより学生が英語に対してより興味を持つようになるかを検証する。

### 4. 計画の実践(授業を実践する・データをとる)

14回の授業計画をたて、それに従って授業を行い、学生の反応を見ながら修正をする。50語の英作文の提出をメールで行い、添削もメールで返却する。これらの電子化されたデータを分析に用いる。

### 5. 結果の検証(結果を2と比べる)

全体的な授業に関する学生の感想を最終授業時に質問用紙を配布し、回収する。無記名アン

ケートにより、50語の英作文により英語に興味が増したかを聞く。

## 6. 報告（仲間に報告する）

本学の人文学部の自己点検評価委員会主催の教員懇談会でアクション・リサーチの結果について筆者を含む二人の教員が報告し、学部教員との懇談を行う。

アクション・リサーチと一般の学術研究とはいくつかの点で異なっている。一般の学術研究では、研究から得られた結果が普遍性を持つことが前提であるのに対し、アクション・リサーチでは当該授業の改善を目的とし、授業の問題点や解決について複数のデータを集め、そこから問題点解決への示唆を得ることが第一の目的となる。アクション・リサーチは実際の教室における教育実践の向上を目指す試みであるので、その結果がすぐに他の実践にも応用できる普遍性を持つかについて他の科学的な研究方法と異なっていると言える。

上にも述べたように実際のアクション・リサーチは、伝統的なリサーチの手順である目的、実験、結果の分析というような直線的な研究過程をたどらず、授業の途中でも修正や変更をしながら、授業内で教員と学生が相互的に交流し、問題点を認識し、その解決を目指し、お互いに学びあいながら向上を目指す。そして、問題が解決されれば、さらに新しい問題解決に向け、より高い実践へとらせん状に経験を重ねていく（Edge, p.3）。このようなプロセスを重視する立場をとると、アクション・リサーチは上述の直線的な過程ではなく、次のような段階を繰り返しながら授業の改善を行うプロセスであると考えられる。

- ・アクション 本人がアクションを行なう。
- ・観察 何が起きているかを観察し、更に問題をしぼる
- ・内省 絞られた問題点について内省し、
- ・計画 将来にむけての計画をたて、
- ・アクション 現状を改善するためのアクションをし、
- ・観察 変更点を評価するために観察を行う。

（Edge, p.3 筆者訳）

上に述べたように、アクション・リサーチはリサーチの手法を借りてはいるが、授業実践そのものであり、その結果について普遍性を求めることは必ずしも適切でないこと、実験的なリサーチとはその目的や方法が異なっていることがわかる。本研究は佐野（2000）の形式をとりながら、そのリサーチの過程でEdge(1997)のような内省を行いながら行ったアクション・リサーチの報告である。

## ESSC の試みとは？

ESSC (Extremely Short Story Competition) はアラブ首長国連邦 (UAE) ドバイにあるザイード大学のピーター・ハッサル氏により考案され、過去数年にわたりインターネットを通じて UAE 国内の英語学習者に 50 語からなる英語作文の投稿をする機会を提供している。日本では、日本「アジア英語学会」会長本名信行氏が会員によびかけ、同学会が2006年10月から12月まで学会ホームページを通じて日本の英語学習者にこの 50 語英語作文の投稿を呼びかけている。

## 授業内容

筆者の担当する「英語の構造」は人文学部国際コミュニケーションコースに属する講義科目であり、ある程度の基礎的な英語を身につけた 3 年次の学生を対象としている。2006年には73名の学生が受講登録をした。その内訳は 3 年次58名、4 年次14名、科目等履修生 1 名である。

英語の基礎を学ぶ科目としては、基礎教養科目の一部として人文学部では外国語（英語または中国語）8 単位の履修が義務付けられ、1, 2 年次生に週 2 回の 90 分授業が行われている。学生はクラス分けテストを入学時に受験し、クラス分けされている<sup>1</sup>。

「英語の構造」では学生がこれまでに学んだ文単位の統語構造に加え、文脈を含んだ談話単位の構造を指導することを目的として Diane Larsen-Freeman 等の *Grammar Dimensions* を教科書として採用した。しかし、授業開始後、教科書の英語の例文が受講学生にとって難解で談話構造の説明よりも英文の説明に時間をとられてしまうことがわかった。対応策として、R. Murphy の *English Grammar in Use* を補助教材に加えながら授業をすすめた。

## 授業方法

春学期「英語の構造」は 1 回 90 分の講義14回、60分の期末試験からなる計15週の授業である。教科書と補助教材を使った英語の構造に関する授業では、パワーポイントを使い教科書にある文法項目を14回に分け、英文の構成に文脈が重要であることを念頭におきながら、難解な英文には日本語の訳をつけ説明した。授業の要点と例文についてパワーポイントを使いながら説明することにより授業時に黒板に書く時間を省き、演習の時間を確保するようにつとめた。

教科書の説明の後に、*English Grammar in Use* から 1 回の授業に一つの文法項目をとりあげ、プリントを配布し、学生を個別に指名しながら演習を行った。授業の終りに出席確認とその日にとりあげた文法項目の復習を兼ねて、学生に身近な話題を使った英作文を提出させた。その日の授業について質問のある学生はここに書くように指示した。これにより出欠の把握のみなら

ず、学生がどの程度その日の授業を理解したかを確認することができた。出欠の確認をしながら作文を読むことにより、学生が共通して犯す間違い、難しいと感じている点などを把握し、次の授業には、前週の復習を兼ねて説明を加えた。

上に述べたように、14回の中に、4回のESSCに関する授業を含めた。最初の授業でESSCについて学生に説明し、7週目に50語の作文を提出するように指示した。11週目に教員から学生に作文を返却し、学生は期末テストの行われる15週に訂正をした作文を再提出した。7週目の提出方法はすべてメールによる提出とし、メールにより添削をしようと試みたが、実際は半数以上の学生が紙による提出をした。このため11週目までに紙で提出した学生の作文を教員がコンピュータに入力し、全部の学生に訂正が必要な部分に下線をほどこし、短いコメントを付して返却をした。コンピュータ入力はデータ収集の必要性のためであるので、学生の学習とは直接関係はない。この授業は履修学生数が100名を超える可能性のある授業であるので、このような試みを継続するためには学生がメールによる提出をすることを義務づけ、メールによる添削をする必要があろう。

### 英語に対する学生の態度：アンケート1

学期の初めに、受講学生の英語・英文法・英会話に対して抱いている意見や態度を知るためにアンケートを実施した。質問は5項目で、次の5段階で答えるように指示をした。

1. そう思わない
2. あまりそう思わない
3. どちらともいえない
4. まあそう思う
5. そう思う。

アンケート項目

問1. あなたは英語が得意ですか？

問2. あなたは英語が好きですか？

問3. あなたは英語ができるようになりたいですか？

問4. あなたは英文法が英語コミュニケーションに役立つと思いますか？

問5. あなたは英語を話すことは読み書きよりも大切だと思いますか？

表1 アンケート1の結果

レベル	人数	問1	問2	問3	問4	問5
初 級	7	1.4	3.3	4.6	3.9	2.4
初・中級	13	2.2	4.0	4.8	3.9	2.6
中級・集中	18	2.7	4.4	4.8	4.2	1.9
中国語	3	2	3.3	5	3.7	3
合計	41	2.1	3.7	4.8	3.9	2.5

表1によると、すべてのレベルの学生は自分の英語に自信が持てず（問1）、どちらかといえば英語が好きで（問2）、英語ができるようになりたいと強く希望し（問3）、英文法はコミュニケーションに役立つと考え（問4）、話すことができれば読み書きはいらぬとは考えていない（問5）ことがわかる。学生たちは「英語が話せれば文法はいらぬ」と考えてはいないことがうかがえるが、英文法の授業で行われたアンケートであるので、英文法に否定的な答えを学生は書きにくかったことを差し引いて考える必要がある。

## 結果

50語の作文が学生の英文法と英作文に対する態度にどのような影響を与えたか、また、教員がこれを導入することにより、学生をどのように把握することができたかについて以下に考察する。はじめに、学生の作文例をあげ、この試みによりそれぞれの学生が英語で和文英訳の演習では表現できない個性を發揮し、教員がこの試みにより個々の学生を知ることができたことを示す。次に、教員がどの程度彼らの文法習得の度合いを把握できたかを示すために、全体の学生の作文に共通して見られる特徴のいくつかを示す。最後に学生の授業に対する感想と定期試験時に実施したアンケート2の結果を示す。

## 50語の作文

次の作文は学生が書いたものである。

### Cell Phone

Cell phone. This is everything to me. I send some e-mail, call my friends and listen to music by it everyday. When I lose it, I get withdrawal symptoms. Yes. I am a cell phone addict. Once when I was a pupil, I didn't need a cell phone. What changed me?

### 携帯電話

携帯電話。これが私のすべてだ。毎日、これでメールをいくつか送り、友達に電話し、音楽を聴く。携帯をなくしたら、わたしはひきこもりになってしまう。そう、私は携帯電話中毒だ。小学生のときは携帯なんていらなかったのに。何が変化したのだろうか？（筆者訳）

### Happening in Train

I go school by train everyday. So I play game on my cell phone to pass my time in the train. One day, I am absorbed in the game. I didn't notice arrive the station. I go past long way. I decided to do not play game in the train.

### 電車での出来事

私は毎日電車で通学している。電車の中で時間をつぶすため携帯でゲームをする。ある日、ゲームに夢中になってしまった。駅に着いたのも気づかなかった。ずっと乗り越してしまった。もう電車の中でゲームはしないと決心した。(筆者訳)

これらの作文には文法的な誤りがないわけではない。しかし、これらの文にはそれぞれの学生でなければ書けない一人一人の日常の経験が表現されている。これを書くために学生は自分で考え、書き直し50語の作文を書いたであろう。このような経験は教員が指示を与える英文法の練習問題の演習からは得られない。また、学生が書く作文を読むことにより、教員は多人数の授業では通常知ることのない個々の学生の日常生活の一面や考え、現在熱中していることなどに関し作文から知ることができ、文法指導だけでなく個々の学生の作文に対して感想を述べることができる。

### 学生の作文に見られる共通の表現

学生の書く作文を日本人の書く英語のコーパスとして見ると様々な特徴が見られる。ここでは文法教育の観点から学生の書く作文における英語の誤りとして考察するが、誤りと考えるか日本人の英語の特徴と見るかは、分析の立場や目的による。ここでは国際間の標準的なコミュニケーションで使われる英語を基準として以下の分析を行うことにする。

述語部分には次のような逸脱が共通して見られる。例文1)と2)に見られるように、学生は助動詞を本動詞なしに用いている。

1) I am happy that I can precious experience.

2) But I can't reality affection.

また、形容詞と動詞が区別されずに動詞とbe動詞が使われる例も多く見られる。

3) I am belong to a band.

日本語を学習する英語話者は日本語の形容詞に時制があることに驚くという(佐々木、p.31)。上の例を見ると、反対に日本人の英語学習者にとって難しいのは、日本語では同じような働きをする動詞と形容詞が、用法がかなり異なっていることなのであろう。

主部についていえば、日本語の格助詞「は」は文中の要素を文頭に置く働きをするので主語であると考えられやすく、4) 5) のような英文が書かれる原因になると考えられる。4)は「仕事にはまだ慣れない」、5)は「大学は疲れるし、朝は眠い、でも楽しい」の直訳であろう。

4) The work yet never gets used.

5) College life is get tired, and morning is sleepy, but always happy.

日本語の母語話者が日本語を話すときには、格助詞「は」がどのような機能を持つか、または、自分の話す文の主語が省略されているかなどについて特に意識しない。4) 5) のような例を見ると、一般の学習者は自分の母語でないことばで表現するときにも、意識せずに日本語の構造を目的言語（この場合は英語）にあてはめるのであろう。

### 学期末における学生の授業に対する感想

授業の最終日に学生に次のような質問をして、記名のコメントを求めた。

- 1) 教科書についてどう思いましたか？
- 2) プリントの練習問題についてどう思いましたか？
- 3) 授業の運営についてどう思いましたか？
- 4) 教員への感想、要望を書いてください。

毎週提出される学生の作文から教科書が難しすぎたことは予想していたが、コメントにも多くの学生は教科書が難しかったと述べ、*English Grammar in Use* を利用した文法演習は役立ったと述べている。このプリントの英語の指示文が難しかったと述べた学生も少数見られた。

出席のチェックも兼ねた記名の感想ではあるが、学生が教科書と補助教材についてどのような感想を持ったかについてこの調査である程度把握することができた。次年度は学生の習熟度に合った教科書を慎重に決める必要がある。

### 50語作文に対する評価：アンケート 2

期末テストと同時に2度目のアンケートを実施し、アンケート1と同様に5段階で答えること、1年次の英語クラスを記入するよう指示した。

1. 50語作文を書くのは楽しかった。
2. 50語作文によって教員との交流が増した。
3. 他の学生が書いた50語作文を読んで刺激を受けた。
4. 50語作文を書くことによって英語で自分を表現する機会を与えられた。
5. 50語作文を書くことによって英文法に対する興味が増した。
6. 50語作文は自分には難しすぎた。
7. 50語作文というアイデアはよいが実施方法が良くなかった。
8. なぜ文法の授業に50語作文が導入されたのか理解できなかった。
9. 50語作文または授業について自由に感想を書いてください。

表2 アンケート2の結果

レベル	人数	問1	問2	問3	問4	問5	問6	問7	問8
初級	10	3.4	3.4	3.2	3.7	3.3	4	2.2	2
初中級	13	4	3.5	3.8	3.8	3.1	3.3	2.5	1.5
中級・集中	23	3.9	3	3.5	4.1	3.3	3	2.1	1.4
合計	46	3.8	3.3	3.5	3.9	3.2	3.3	2.2	1.5

表2により、初中級、中級・集中の学生たちは50語作文を書くことを楽しみ、これを書くことにより英語で自己表現をすることができたと感じているのに対し（問1、問4）、初級の学生たちはこの課題が少し難しかったと感じていることがわかる（問6）。また、文法の授業に50語作文を導入したこと、また、その導入の仕方については特に否定的な感想は多くはないことがわかる（問7、問8）。

このアンケートは無記名であるにもかかわらず、特にきびしい批判や否定的な感想は見られなかった。これは、14週間の間にこの授業に興味を失った学生や課題を苦痛に感じた学生は途中で放棄したことも影響しているであろう。73名の登録学生の内、43名の学生が期末テストを受験した。これは全体の63%であり、かなりの数の学生が途中で放棄したことも事実である。

## アクション・リサーチの結果

（筆者の授業）

アンケートや授業の感想に見られるとおり、多くの学生が50語作文に興味を感じ、これに刺激を受けたと答えている。50語作文によって学生が英文法に興味を持つように仕向けることはできなかったが、英文法に作文を導入することにより、英語による表現に対する学生の興味をある程度深めることができたといえる。初級の学生にとっては難しい課題であったが、異なるレベルの学生が、自分の英語力に応じて作文に取り組むことができた点も評価されよう。

筆者が最初に予測しなかったことであるが、学生が書く作文を読むことにより学生が何を考えているか、どのようなことに興味を持っているかなどを知ることができたことはこのアクション・リサーチによる収穫であった。また、学生が困難を感じる文法項目、日本語の干渉についても資料を得ることができたので次年度の授業にこの結果を生かしたいと感じた。

（学部全体の授業）

2006年9月の学部の教員懇談会において、アクション・リサーチの報告を同僚の英語担当教員

と二人で行った。どのような分野の授業であってもアクション・リサーチの試みは応用が可能だということ、そして、これまで学部で行ってきた相互授業参観に代わる学部のファカルティー・ディベロプメントの方法として採用できるのではないかと提案した。他の教員がどのような授業を行っているか、また、どのような問題を抱えているかをお互いに知ることは学部全体の授業の改善を行う上で重要なことだと考えられる。

#### (50 語作文と日本「アジア英語学会」)

筆者の属する日本「アジア学会」は学会の10周年記念行事の一環として、2006年10月1日から3ヶ月間学会のホームページ上で50語の作文を受け付けている<sup>2</sup>。この試みは筆者の授業に対する学生の感想からもわかるとおり、日本人の英語学習者に英語で表現をする機会を提供する試みであり、画期的な試みとして賛助団体からの支援も多く寄せられている。同時に、このような試みを続けることにより、日本人の英語の特徴をあらわすコーパスの構築が可能になる点で学問的にも有意義な試みである。

### 結論

アクション・リサーチの方法を採用することにより筆者は自分の授業をより客観的に把握し、授業をより興味深く、個々の学生に応じた指導を工夫することができた。50語作文は特に有効であった。また、アクション・リサーチの方法を学部の他の授業に応用することも可能であるので、ファカルティー・ディベロプメントのひとつの方法としても有効であると考えられる。この50語作文の規模を拡大し、学会規模で実施することにより、50語作文の意義もより深くなることであろう。この試みにより日本の学生達に英語を使う機会を提供するだけでなく、日本人の使う英語のコーパスを構築し、日本人の英語の特徴を明らかにし、これを教材作成に生かすことができる。他のアジア諸国にもこのような試みを広げることにより、それぞれの国の英語の特徴の比較も可能となるであろう。

### 注

<sup>1</sup> 日本英語検定協会の実用英語検定に準拠したクラス分けテストを入学時に実施し、クラス分けに利用している。学生は入学時に英語・中国語どちらを選ぶかを選択し、英語を選択した学生の中で特に英語を学びたい学生は英語集中を選択する。学生は初級①～④、初中級⑤～⑧、中級・集中⑨～⑫、中国語⑬～⑮の20人前後15グループに分けられる。教養英語に加えて、一般の学生が日本人教員から基礎演習の指導を受けるのに対し、集中英語クラスの学生はネイティブ教員から英語で基礎演習の指導をうけ、英語のレポートの書き方、プレゼンテーションの方法などを

学び、3年次からの専門演習に備える。

<sup>2</sup> 下記の学会のホームページには ESSC の説明、応募作品、応募方法が掲載されている。

<http://www.jafae.org>

**参考文献：**

Edge, J. Ed. 2001. *Action Research*. Virginia: TESOL Inc.

Hassall, P. Devised and Ed. 2006. *Emiratia: World English Voices of Emirati Women—JAFAE'S Official Guidebook to the Extremely Short Story Competition-*. The Japanese Association for Asian Englishes.

佐々木瑞枝 1989 『留学生と見た日本語』新潮社.

佐野正之編著 2000 『アクション・リサーチのすすめ—新しい英語授業研究』大修館書店.

Wallace, M. J. 1998. *Action Research for Language Teachers*. Cambridge: Cambridge University Press